

市民の手で
文化のみえるまちづくり



文連ニュース 52号

季刊 2022年 春号

編集・発行

姫路地方文化団体連合協議会

〒670-0083

姫路市辻井5丁目5-36

079-290-5450



「静黙」 小田かおり

「浄化あるいは再生」

ウエダキョアキ

ルネッサンススクエアで展示の機会を得て、約3年置きにこのテーマで作品発表を続けてきて今回で6回目となりました。

30年程前、何かテーマを決めてそれに沿った作品作りをしてみたい。それを続ける事によって何か見えてくるものがあるのではないかと思い、このテーマを考えました。

特に表現したいものが決まっていた訳ではありませんでしたが、ふと「浄化あるいは再生」という言葉が頭に浮かびました。

というのもその頃の自分の制作は、廃材や捨てられた物、例えば屑鉄、アルミ缶、流木、古材などを材質にこだわらず、素材として再構築させる事で作品にしていました。

展示を重ねる度に以前発表した作品に加筆したり再構成させて見え方を変えたりもしてきました。発表を重ねる事で、見に来た人それぞれに何かを感じてもらえたり、様々な受け取り方をしてもらえるのは、是非こう感じてほしいという具体的なテーマでは無いからこそなのかもしれません。30年間の間に目の当たりにしてきた時世の中での再生の姿がこのテーマに繋がっている様にも思えて、自分の創作の意欲になっていると思います。



役目を終えたものが他からの作用によって生まれ変わる。

再構築することで時間や経過を経たからこそある美しさ、力強さ、浄化。

その時々によっても見え方が違ってくる。そんなことに不思議な力を感じています。

自然の摂理。やがてまた生まれる。枯れて朽ちてもさらに美しさを持ってまた芽吹く。

目には見えない何かの力。その関係性や繋がり、展開、増殖…そんな尊さの中に人の営みもあってほしい。新たな明るい未来を想像してほしい。

表現への想いはまだまだまとまりませんが、この世の全てのもの、事象までもが

素粒子という「因子」がぶつかったり、繋がったりすることで出来上がっているそうです。

人の想いまでもが全てと繋がっているのなら、いつかこのテーマも何かに繋がって

くれるのではないかと思います。

「代わり映えしない日々」の深さを

小田かおり

この度は絵を起用いただき感謝の言葉もありません。

小田かおりと申します。

東日本大震災復興支援文化展『連(れん)』が御縁で、畏れ多くも主催のひめじ文連さん発行の文連ニュースの表紙を描かせていただきました。

表紙に起用いただいた本作は2021年の姫路市立美術展で選外でしたが、初めての公募応募作品であり、大切な一枚です。

そのおかげで、2022年は同市展で入賞が叶いました。

私は「抽象画入門I」「抽象画入門II」の著者金子善明先生に師事しておりますが、師にはデッサンとクロッキーという基礎根幹を教わり「抽象」を描くにはまだまだ未熟者です。

けれど師を通して出逢った人、文化団体に活動する人の影響から高度な芸術作品は素晴らしいけれども、完成された作品はその瞬間に完結してしまう怖さがある。「記憶に残る」かは観る人に委ねられている。

ということを教わりました。

首を傾げ、色々想像して貰える……余白や疑問が残るような…。

少しでも心にひっかかりを感じて貰えたらこんなにも嬉しいことはありません。

「代わり映えしない日々」の変化、「枯れ」「衰え」た重なるの深さを描きたいと”日々”思っております。

そんな日々が続いて欲しいと昨今、願うばかりです。

想い

岸野氏の死を悼む

得平 秀昌



1月13日の昼前に、岸野さんの奥様から、死の知らせを受けた。彼とは蕎麦打ちを30年程一緒に習っていて、次のそば打ちをいつにするか、連絡しなければと思っていた矢先。驚いた。と同時に自分の死を予知する鈍感さになさけなくなった。

昨年令和3年の10月に、龍野の「ギャラリーよきかな」に来られたとき、翌年の7月に話が及んだときに、岸野さんが「そこまで生きているのかな」とぼつりと漏らされた。もう既に身体は深く蝕まれていたのでしょうか。

思えば30数年の付き合い。人の好悪の激しい私がずっと信頼し続け得たのは、岸野さんの類い希な誠意を常に感じていたからだろうと思います。

同時にこの誠意と信義の故に、姫路市立美術館における出来事は、激しく彼を傷つけたであろうと推察します。(私はいまだに怒っている)彼が多くの人のように、問題から逃げられる人なら、彼の命を奪った病にはならなかったであろう。

それにしても、かえすがえすも惜しい人を亡くしました。私にとっても、そして広く姫路市の美術界にとっても。残念、無念。

ご冥福をお祈りします。

2021年 姫路文化賞受賞式

令和3年12月5日(日)
10:00～12:00
於：高砂市 鹿島殿
参加者 102名



第57回姫路文化賞

小栗栖 健治 (歴史研究)
松本 コン太 (写真)

文化功労賞

木内 内則 (中世城郭研究)
宮川 吉正 (ピアノ調律)

特別賞

BENOIT MILLOGO (民族音楽)

第39回黒川録朗賞

瀬川 健二郎 (文芸)
野田 かおり (詩・短歌)
松崎 晟山 (邦楽)
村岡 正樹 (工芸)



先行きの見えないコロナ禍、2021年受賞式も、会食を伴わない形での開催となった。会長挨拶に始まり、受賞式では、表彰状と副賞のオブジェ（ウエダキョアキさん作）を受け取って頂いた。表彰状の文面については、毎年、選考委員会で「その方がもらって嬉しいか」を心にとめ、推敲を繰り返しているが、多大な功績や一層の活躍への期待と応援の気持ちを、1枚の紙にその方にふさわしく表すのは難しい…。

受賞式に続き、受賞者お二人にパフォーマンスをお願いした。松崎晟山さんの尺八演奏「上弦の曲」では、奥様、新福かなさんの琴の演奏とともに、豊かな邦楽の世界に浸ることができた。ベノワミロゴさんのジャンベを打ってのブルキナファソの民族音楽で会場は一転、お祭りを思わせる楽しい雰囲気に包まれた。

また、小栗栖健治さんのスピーチの中で、地獄絵図の読み解きを依頼。貴重な地獄絵図を前に、興味深いお話を聞くことができた。

受賞者とその紹介者のスピーチでは、限られた時間にもかかわらず、それぞれ異なるジャンルのお話に新たな興味と感動を覚えた。

ただ、盛り沢山のプログラムに、スピーチ時間制限の協力を頂いたにもかかわらず、終了時間が大幅に遅れてしまったことは申し訳なく、猛省しきりだ。
(長森恵子)



受賞式の後、ベノワミロゴさんからお礼のお手紙を、瀬川さんからは、文連ニュースの原稿募集に際して「当日のお礼のことばを…」とのご寄稿を頂きました。次に掲載させていただきます。ありがとうございました。

心よりありがとうございます

今日は私にとって大きな大きな意味のある一日でした。
才能溢れる方々が並ぶ中に自分自身がいました。ジャケットとネクタイを身にまとった沢山の人の前、そう、私にとっては非日常の世界にいました。まるで夢を見ているかのようでした。
突然、BENOITMILLOGO という名前が呼ばれました。
それは夢ではなく現実でした。
初来日のときから今日まで私を支えてくれた皆さん、本当にありがとうございます。
みなさんのアドバイスとサポートは私にとってとても大切です。これからも一緒に旅を続けることができるように、いつも私のそばにいてください。
私はこの賞を私の国のブルキナファソ、そして皆さんに捧げます…
平和な世界のために手を取り合しましょう。

ベノワ ミロゴ
BENOIT MILLOGO

お礼のことば

本日、姫路文連さま及び関係の方々のご尽力により、このような盛大な受賞式を催してください、誠にありがとうございます。

長い間、小学校の一教師として「教育実践」という難問を解こうとしてきましたが、いまだ答が見つかりません。

退職してからは、好古学園大学校で歴史を学習し、古文書にも興味をもちました。そんな折、あるきっかけから神沢杜口「翁草」に出会います。江戸時代中期、京都町奉行所の与力と現代に生きる私とが、互いに朋友となります。そして5巻50章からなる作品の草稿を書き上げました。どこかに載せてくれるところはないかと探していたとき、ふと「姫路文学」のことを思い出しました。

実は、「姫路文学」の創刊者である沖塩徹也先生と、私の母は高岡尋常小学校で同級生でした。母はいつも「てつやはん、てつやはん」と気安そうに話してくれていました。だから私は幼いころから「〈てつやはん〉なる人物は、どんな人やろ？」と、不思議に思っていました。十九歳のとき、思い切って沖塩先生宅を訪れ、夜が更けるまでお話を伺いました。その静かな語り口と上品な物腰は、今も印象に残っています。それが半世紀を経て「姫路文学」に入会する大きな動機になりました。

『遊筆の朋—「翁草」』と銘打って、3年に渡り「姫路文学」に掲載しました。この度一冊の本として出版でき、黒川録朗賞にご評価いただきましたこと、「姫路文学」同人の皆さまのおかげであると厚く御礼申し上げます。

最後に、物書きらしく、今の心境を歌に詠んで締めたいと思います。

振り返る七十四峰（ほう）霧霞み 次ぎなる坂に薄（すすき）群れしも

二〇二二年（令和三）十二月五日

瀬川健二郎

(公益財団法人)福島県文化振興財団から感謝状贈呈

第4回・第5回東日本大震災復興支援文化展「連(れん)」の収益金100万円を、公益財団法人福島県文化振興財団へ2022年5月20日に寄付致しました。

これに対して、福島県文化振興財団から三名(理事長:大沼博文氏、福島県文化センター副館長:鈴木智子氏、担当主事:荒川瑛楠氏)が姫路に来られ、2022(令和3)年11月2日(火)午後2時、姫路文連事務所(姫路労音内)で感謝状と記念品(赤べこ)を受け取りました。



姫路文連から小坂、築谷、大西、長森、西脇、藤尾の6人が出席しました。

相互の団体関係資料を交換し、和やかに歓談しました。文連からお土産に「御座候」を贈りました。

(小坂学)

姫路地方文化団体連合協議会 2022年総会

2022年姫路地方文化団体連合協議会の定期総会の開催を2022年2月19日(土)午後2時から、姫路市市民会館第2教室(5階)で予定していましたが、新型コロナウイルス感染が大きく広がり、第6波が始まっている中であり、開催方法を変更し、書面による表決をお願いしましたところ、団体(6)、個人(22)から書面での表決がありました。

2021年活動報告、2021年会計報告、2021年会計監査報告、2022年活動案、2022年予算案、2022年役員案についての書面表決は全てが賛成でした。

総会后、講演会「講師:木内内則氏(中世城郭研究家) / 演題:「播磨の山城と置塩城〜その歴史から見えてくるもの」」を予定しておりましたが、中止致しました。

会長 小坂学

2022年 姫路文連5回連続講座 茶座「いま・はりま」中止

今年度の事業として総会で決議された茶座ですが、その後検討の結果、遺憾ながら今年も中止させていただきます。



文連ニュース 原稿募集

次回10月下旬発行の予定です。
活動の発信・日頃思われること・イラストなど、内容は自由です。
取材を希望される方はご相談下さい。
11月〜4月位までのコンサートや展示会など、PRしたいイベントなどの情報もお寄せください。

繋いでいきたい 一奥の深い藍作・その魅力一

【藍を共に学ぶ方募集】

昨年末、漠然と藍を志したい人と一緒に仕事がしたいなと思うようになりました。

現在播磨藍では妻と両親と娘の力を借りながら作付けを行なっています。しかし徐々に今の体制では現在の耕作面積を維持するのが厳しくなってきました。両親はすでに80歳を超えており、できることも限られてきました。それでも少しでも助けてやろうと藍粉成しや葉の取り入れなど頑張ってくれています。私はもう手伝ってくれなくてもいいよと言うのですが、それでも出てきてくれます。

私たちは今後どうすべきなのか折にふれ話し合ってきました。作付けを減らすべきなのか?もし減らせば、菜(すくも)をお届けできない方も出てきます。雇い人を募って負担を軽減することも考えますが、都合の良い時だけにきてもらえる方も難しく、またシーズン通して雇用できるほどの経営でもありません。現在農業普及センターの方々ともご相談するなどしていますが、なかなかいい案が出てきません。この先どの道を選択するにせよ、決断をしてゆかなければなりません。

この仕事は見た目以上に大変なことも多いかとも思いますがそれ以上に奥が深く、一生かけて向き合ってもまだ余りある魅力あるものだと感じます。

正直に言えば播磨藍にとって一番負担の少ない選択はやはり作付面積の縮小です。私は元来人と付き合うのが苦手な方で、だからこそこの仕事をしているといってもよいくらいです。

でも歳を重ねたせいなのか繋いでいくことができればいいなと思うようになりました。

藍の世界に飛び込んでから足掛け25年になる中、教えるというほどのものはなく、天候の影響を大きく受ける中、去年は植え付け自体、初歩的なミスをしてしまうなど、まだまだわかっていません。でも共に学びたいという方がおられましたら、こんな話があるよと声かけしていただけないでしょうか?雇用形態も研修なのかアルバイトなのか期間も何もかも相談しながら決めていきたいと考えています。条件はありませんが、お互いに話し合いの中で納得される方であればいいかなと思います。

一緒に藍作の素晴らしさを共感しあえたら嬉しいなと思います。

播磨藍 村井弘昌

お問い合わせ

080-3112-9672 村井弘昌

Instagram[@harutora04] DM Facebook[Tomomi Murai] メッセージ

”播磨藍” かつて播磨(地方)の辺りは藍が盛んに栽培されていた土地でした。その歴史は古く、平安時代に遡ると見られています。今はその足跡を辿ることすら難しくなっていますが、村井さんがその地元西脇で藍作を始められ、20余年になります。

2月に藍の種をまき、葉を刈り取る。10月から仕込み一細かく切った藍の葉を発酵床「寝床」で4カ月かけて発酵一、翌2月、全国の紺屋や作家のもとへ届けられます。

藍の染料”菜”の製造は、藍作農家の高齢化などが要因で、全国的にも年々減少しているとのこと。そんな中、村井さんの”播磨藍”が、是非繋がってほしいと願わずにおられません。